



2017/09/28

第3回心のバリアフリー学習推進会議

1. 交流及び共同学習の取組
2. 研究所実施の調査から
3. インクルーシブ教育システム構築支援データベース（インクルDB）の活用

国立特別支援教育総合研究所

星 祐子

1. 交流及び共同学習の取組

～筑波大学附属視覚特別支援学校の取組の紹介～

①幼稚部

- 学校近隣の公立幼稚園、居住地の幼稚園における交流保育の実施

②小学部

- 週1日固定した曜日に居住地校交流
- 小学部3年生が、附属小学校同学年の理科の授業に参加
- 小学部児童全員が近隣の小学校の行事に参加

③中学部

- 本校中学部生と附属中学校間で、両校の生徒会が中心となって企画を練って交歓会の実施

④高等部

- 本校高等部生とT大学附属高等学校間で、両校実行委員会が話し合いを重ね、企画を考えて交歓会の実施

⑤クラブ活動における交流及び共同学習

- 本校寄宿舎のブラインドサッカークラブ、附属中学校サッカー部、附属駒場中・高等学校のフットボールクラブ、筑波大学蹴球部等によるブラインドサッカー交流

交流及び共同学習

◆小学部3年生の理科の授業実践

- 筑波大学附属小学校(40名)と附属視覚特別支援学校3年生(2名:全盲、弱視)。
- 一つの単元を取りあげる。
- 附属小の教科書「明かりをつけよう」→視覚情報に頼らずに、「電気のはたらきを知る」という単元のねらいを学ぶことが可能な「モーターを回そう」に変更。
- 4日間6時間の学習。
- 授業者は小学校教員、附属視覚の教員はサポート。

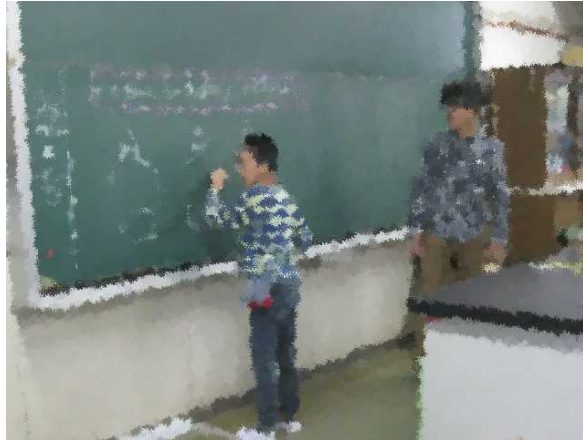


附属視覚の児童の感想

- いつもの二人での授業とは違って、たくさんの友達の意見を聞くことができ、いろいろな考えがあることがわかった。
- モーターと乾電池のつなぎ方や電気を通すもの通さないものについてよくわかった。
- 最初は緊張したけど、一緒に勉強したり、話したりしているうちに、緊張しなくなった。



附属小学校児童の日記から



交流及び共同学習

◆ブラインドサッカー交流



附属視覚特別支援学校寄宿舎のブラインドサッカークラブ、附属中学校サッカー部、附属駒場中・高等学校のフットボールクラブ、筑波大学蹴球部等によるブラインドサッカー交流

- 一緒に準備
- 各校・団体の活動報告
- ブラインド(全盲)体験(歩行、片足立ち、鬼ごっこなど)
- ブラインドサッカー基礎練習体験(ドリブル、対面パス、シュート体験など)
- ブラインドサッカー(弱視)体験
- 各参加団体別の交流試合
- ミックスゲーム



参加者の感想から

- 健常者も障害者も楽しめるサッカーの素晴らしさにあらためて気付いた。自分がサッカーをしている時に視覚に頼っていることを実感した。(附中)
- 言葉によるコミュニケーションがいかに大事かわかった。これは、現代社会におけるコミュニケーション能力向上に役立てることができる。さらに特別支援学校に対する見方が変わると思う。(駒場)
- 私の学年にはデフサッカーで活躍している仲間がいます。耳が聞こえない中でも自分たちと同じピッチでサッカーをして切磋琢磨しながら練習に取り組んでいます。彼の姿を見ていたため、障害者の方も普通にサッカーはできるという認識でいました。しかし、視覚と聴覚の違いはとても大きいことを思い知らされました。実際に自分がブラインドサッカーの体験をしてみると、「目が見える」ことがどれほど重要なことを痛感させられました。音でボールや味方の位置を把握するのは難しくプレーするのは至難の業です。まわりの支えがないとドリブルすることも困難な程でした。そんな中でも堂々とプレーする視覚支援学校の人たちは素直にすごいと思いました。「見えない、それだけ。」と書かれたブラインドサッカーのポスターは、強がりなどではなく本音なのだと思います。ここにサッカーのさらなる面白さや奥深さを見たような気がしました。カテゴリーは違ってもサッカーで上を志す気持ちは同じである仲間とサッカーができて楽しかったです。(筑波大学蹴球部3年生)

2. 研究所実施の調査から

「インクルーシブ教育システム構築の現状に関する調査」

調査の目的:

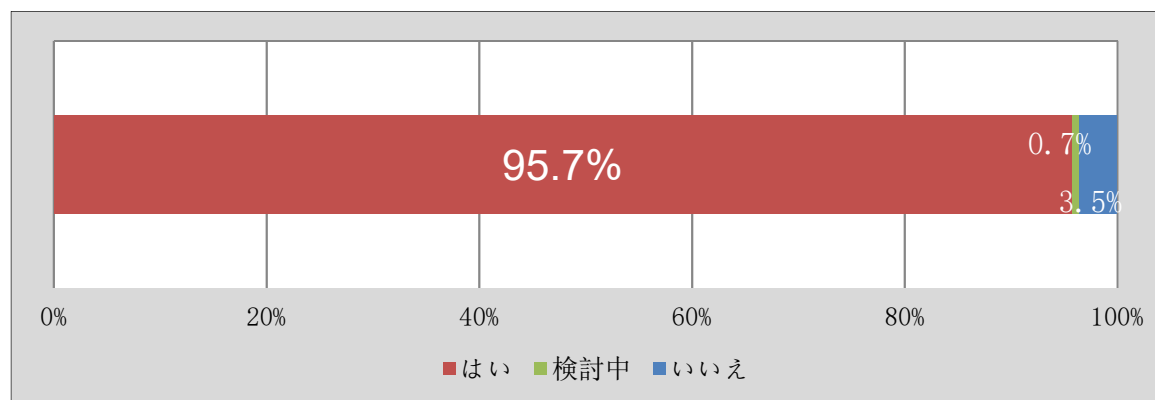
各教育委員会及び幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校におけるインクルーシブ教育システム構築の状況及びその評価の取組を明らかにし、「インクルーシブ教育システム評価指標(試案)」の検討材料とする。

* 本調査の中から、「交流及び共同学習」に関する項目について、特別支援学校の調査結果を紹介。

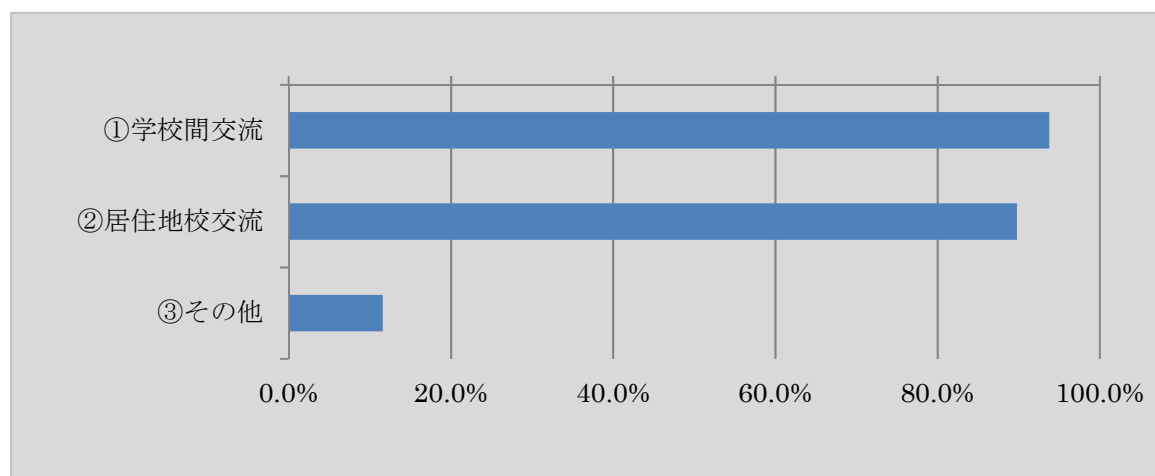
調査数: 特別支援学校 862校(視覚障害:62校、聴覚障害:91校、知的障害:331校、肢体不自由:138校、病弱:70校、併置:170校)

調査回収数: 特別支援学校 676校(78.4%)

Q. 在籍の幼児児童生徒と通常の学校との交流及び共同学習は実施していますか。



Q. 交流及び共同学習の形態について教えてください。



学校間交流 93.8%
居住地校交流 89.8%

その他:
・作品交流
・手紙による交流
・ビデオレターによる間接交流
・障害の体験交流

Q. (交流及び共同学習を実施していないと回答のあった学校に対して) 交流及び共同学習を実施していない主な理由を教えてください。

- ・病気(心身症)のため、他と交流することが難しい子が多い。
- ・該当の生徒がいない。
- ・近隣に適当な学校がない。
- ・実施希望が保護者からない。
- ・以前は近隣高校との交流があったが、互いのカリキュラム実施で、余裕がない。
- ・病院の中の学校、病院併設の特別支援学校のためで交流できる環境にない。

3. インクルーシブ教育システム構築支援 データベース(インクルDB)の活用

インクルDBは、教育関係者や一般国民に向けた理解啓発や具体的なインクルーシブ教育システム構築支援に関する情報を提供することを目的として、平成25年11月に 運用を開始。

* 平成28年度の訪問者数:108,671人

月間平均アクセス数:27,176件

インクルDBの実践事例のダウンロードの仕方

www.nise.go.jp にアクセス / 国立特別支援教育総合研究所で検索

The screenshot shows the homepage of the National Institute of Special Needs Education (NISE). The header includes the NISE logo, navigation links (English, 携帯サイト, サイトマップ), a search bar, and accessibility options (文字の大きさ, 表示色の変更, アクセシビリティツール). The main content area is divided into several sections:

- 特別支援教育情報一覧**: A list of categories including 視覚障害教育, 聴覚障害教育, 知的障害教育, 肢体不自由教育, 病弱・身体虚弱教育, 言語障害教育, 自閉症・情緒障害教育, 重複障害教育, and 発達障害(LD・ADHD・高機能自閉症)教育.
- 研究所について**: Information about the institute, including 災害時における障害のある子どもへの支援 and 図書室の利用.
- 関連リンク**: A section with various links, including 支援教材ポータル and 教育支援機器等展示室.
- インクルーシブ教育システム構築支援データベース(インクルDB)**: This link is highlighted with a red box and a red arrow pointing to it from the right.
- 世界自閉症啓発デー**: A banner for World Autism Awareness Day with a link to the special site.
- 研究成果報告書**: A link to research reports.
- 特総研ジャーナル**: A link to the journal.
- NISE Bulletin**: A link to the bulletin.
- アクセシビリティツール**: A link to accessibility tools.

インクルDB で検索しても 良い

The screenshot shows the homepage of the Inclusive DB website. At the top, there is a navigation menu with links for 'トップページ', '実践事例データベース', '法令・通知等', 'Q&A', '研究報告・リンク', and '教育相談情報'. The main content area features a section titled 'インクルDBについて' (About Inclusive DB) with a sub-section '『合理的配慮』実践事例データベース' (Reasonable Accommodations Practice Case Database). A red arrow points to a blue button labeled '▶ 実践事例データベース' (▶ Practice Case Database) within this section. To the right, there is a '関連情報' (Related Information) section with buttons for '▶ 法令・通知・用語等' (▶ Laws, Notices, and Terms), '▶ Q&A', '▶ 研究報告・リンク' (▶ Research Reports and Links), and '▶ 教育相談に関する情報' (▶ Information on Educational Consultation). The website also includes a search bar at the top right and a footer with the NISE logo and name.

【Ⅰ】対象児童生徒等の障害種 **必須**

and or

- 視覚障害 [17]
- 聴覚障害 [32]
- 知的障害 [104]
- 肢体不自由 [46]
- 病弱・身体虚弱 [21]
- 言語障害 [22]
- 自閉症 [93]
- 情緒障害 [26]
- LD (学習障害) [39]
- ADHD (注意欠陥多動性障害) [49]
- 全て選択/全て解除

【Ⅱ】対象児童生徒等の障害の程度
[\(学校教育法施行令第22条の3\)](#)

- 該当 [123]
- 非該当 [62]

【Ⅲ】対象児童生徒等の在籍状況等

- 幼稚園 [22]
- 小学校 (通常の学級) [29]
- 小学校 (通常の学級・通級による指導) [63]
- 小学校 (特別支援学級) [83]
- 中学校 (通常の学級) [15]
- 中学校 (通常の学級・通級による指導) [12]
- 中学校 (特別支援学級) [18]
- 高等学校 [16]
- 中等教育学校 [0]
- 特別支援学校 (幼稚部) [1]
- 特別支援学校 (小学部) [30]
- 特別支援学校 (中学部) [11]
- 特別支援学校 (高等部) [7]

【Ⅳ】対象児童生徒等の学年

- 年少 [5]
- 年中 [4]
- 年長 [14]
- 小1 [30]
- 小2 [36]
- 小3 [39]
- 小4 [38]
- 小5 [27]
- 小6 [35]
- 中1 [20]
- 中2 [21]
- 中3 [15]
- 高1 [6]
- 高2 [8]
- 高3 [9]

【Ⅴ】[基礎的環境整備](#)の観点

- 基礎① ネットワークの形成・連続性のある多様な学びの場の活用
- 基礎② 専門性のある指導体制の確保
- 基礎③ 個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成等による指導
- 基礎④ 教材の確保
- 基礎⑤ 施設・設備の整備
- 基礎⑥ 専門性のある教員、支援員等の人的配置
- 基礎⑦ 個に応じた指導や学びの場の設定等による特別な指導
- 基礎⑧ 交流及び共同学習の推進

【Ⅵ】[合理的配慮](#)の観点

- 合理①-1-1 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮
- 合理①-1-2 学習内容の変更・調整
- 合理①-2-1 情報・コミュニケーション及び教材の配慮
- 合理①-2-2 学習機会や体験の確保
- 合理①-2-3 心理面・健康面の配慮
- 合理②-1 専門性のある指導体制の整備
- 合理②-2 幼児児童生徒、教職員、保護者、地域の理解啓発を図るための配慮
- 合理③-1 ※専任等の支援体制の整備

[検索画面に戻る](#)
[1](#) [2](#) [3](#) [4](#) [次へ>](#)

1

[詳細](#)
【Ⅰ】障害種

視覚障害

【Ⅲ】在籍状況等

特別支援学校 (幼稚部)

検索キーワード

全盲、無眼球症、触察、遊び、生活習慣の自立、社会性の育成、理解推進、保護者支援

概要 (500文字程度)

A児は、B特別支援学校(視覚障害)幼稚部年長組(5歳児)に在籍する全盲の幼児である。本事例は、A児がC幼稚園において交流及び共同学習を行い、その遊びや生活における合理的配慮を実践し検討を行った事例である。なお、A児の交流及び共同学習は年少組(3歳児)4月より継続して実施している。

A児は、無眼球症であり、全盲で、触察と言語により事物の存在等を理解する幼児である。保護者は、視覚障害に対する専門的な指導とともに、同年齢の幼児集団の中で豊かな社会性を育ててほしいとの願いをもっている。

A児が週3日、登園から降園までの生活を同園で過ごし、同年齢の幼児たちとの遊びや生活を経験する中で、幼稚部段階におけるA児への合理的配慮、障害のある幼児たちへの理解推進などについて検討を進めてきた。その際、B特別支援学校幼稚部教諭1名が定期的にC幼稚園の訪問を行い、保育記録をとり、客観的な分析の資料とすることで評価を行ってきた。また、訪問の際には、両校園の関係者、保護者との話し合いの機会を設け、情報交換を行うとともに、B特別支援学校教諭が助言を行ってきた。

ファイル名 : H27_0368SK3-VI

2

[詳細](#)